

織田信長

一 龍齋貞花

講談師

過酷な税の取り立てを行った大名は、決して名君と呼ばれることはない。

戦国時代の英雄、織田信長はさまざまな革新的な政策を行ったが、その代表的なのが「楽市・楽座」

「楽市・楽座」とは、それまで特権階級や利権集団による商工業を、自由化しようとした政策です。

中世の荘園制度では、商工業者は、座（同業組合）・問丸（問屋）・株仲間（特定の身分・格式などを有した仲間）などの組合を独占販売権・非課税権・不入権（外部権力の立ち入りを拒否する権利）などの特権を得て既得権益化していたのです。

現場の担当者にも賄賂を贈って、自由販売しようとした者を闇業者として厳しく取締ってもらう。そのため組合に入っていない商工業者は、荘園内で商売することは出来なかった。これに対し1577年

信長が定めた「定、安土山下町中」という13ヶ条の掟書きに、「安土城下じゅう楽市としたからには、諸座・諸役・諸公事（雑役・夫役＝労働で納める課税）など、すべて免許する」と通達。

小牧時代にも、町の1部を自由商業地として設けている。

特権組織の撤廃。経済の流動化の支障となっていた関所を廃止して通行料・関税をなくす。その他雑税や棟別税（家ごとに課せられていた税金）の免除など革新的な楽市・楽座を実施。楽市・楽座はそれまでにも六角氏や今川氏が行っていたが、信長はそれを大々的に推し進めたのです。これは信長が本拠を次々と移転したので、すみやかに商工業者が来て、城下町を栄えさせるためだったと、私は思っています。

伊勢神宮に遷宮費を贈るとともに、このお伊勢参りや旅人の悩みでもあった伊勢の関所を廃止させ、関所を通るたびの関税徴収をやめさせました。この伊勢参りの通行税は、江戸時代歩きの旅人すら2ヶ所で取られたという記録もあり、その後も諸税が課せられ、現在の高速道路通行料も同じです。

軍団の確立

信長が強かった要因に、「軍団制の確立」があります。戦国大名の軍勢は、半農半武士体制。種蒔き時や、収穫、刈り入れ

時は、農業に従事するため軍団を組織できなかった。武田×徳川の有名な三方ヶ原合戦、武田信玄の都への進軍も秋の収穫が終わった後で小雪さえ降っていた。上杉謙信も、度々遠征したが、収穫時必ず国へ帰っている。

信長は、武士は武士、農民は農と適在適所で、それぞれの専門制の確立です。

戦国の時代、敵が攻めてくれば田畑は荒され、食糧を奪われ、家は焼かれ、女は犯される。農民・町人が求めたのは、なにより安心して働かせる領主が一番だった。弱い領主はいつも敵に攻められ民はその都度被害をこうむっていた。だからこそ安心して働ける環境を与える領主を大事にした。

「そちは米作りの名人じゃ」「麦作りの1番じゃ」と、農民をほめ、土地も与えるなど、幕末にいたるまで土地持ち、つまり自作農が一番多かったのがこの信長の時代です。

収穫時に攻めていけば、相手は軍団を編成出来ず戦わずして敗北もあり、「楽市・楽座」「軍団制」と領民が自分の仕事に安心して専念できる環境を作ったことが、信長の領地を安定、繁栄させ、天下統一への基礎を築いたのです。

弱者を優遇した。現在は家業に精を出してもやっていけない、なにをしたらいいかかわからない、倒産も少くない。

信長は改革者であり、新時代への扉を

開いた人ともいえましょう。

月曜日夜のドラマ「イ・サン」を見ている方もいらっしゃるでしょう。「他の韓流ドラマは見ないが、イ・サンだけは見ている、面白い」という声を多く聞く、実は私も「イ・サン」だけは見ている。王の後継者であった父は、宮廷内重臣の陰謀によって無実の罪で殺され、その子サン（王の孫で後継者）も同じく宮廷内の陰謀によって度々危機におちいつている。特権組織の撤廃。営業上のきちんとした税を納めれば、闇商人といわれた人たちにも、正規の商いを認めようとしたり、権力者たちの利権をなくし、民の幸せを図る政策を行なおうとしたため、殺害されようとした。度々の妨害を乗り越えて王位につき名君といわれた人物である。

弱者を思い、民のための政治を行ってくれる政治家の出現を願うばかりです。

企業も、社員そしてその家族が安心して生活できる経営、人事管理を行っていくことが当然であり、それが企業の繁栄につながるのです。実名を出して恐縮ですが、大王製紙前会長の行為は罰せられて当然であろうし、多くの株を保有しているからと会社を我が物にすることが許されてよいはずがない。税は国を動かすものであり、民の生活を支えるものです。